時流を読む

ケアメンの歌

農的社会デザイン研究所 代表　蔦谷 栄一

心揺さぶる作品

先日、熊本県で農業をしている敬愛する先輩Y氏から1冊の立派な本が届いた。『道～ケアメン（男の介護）の歌』なる自費出版による短歌集である。

・病床のつれの苦しみ分かち合い
　悔いなき人生夫婦の道なり
・日に三度介助に行っても帰り際
　「帰らないで」に足重くなる
・わがままも元気なあかしと
　思いつつ たしなめれば
　「すみません」という妻いじらし
・一筋に寄り添う夫婦道
　悔いない愛で我が残生を行く

その作品は深く心を揺り動かされるものばかりであった。

感謝と思いやりの夫婦道

Y氏は農家であるが、長年、農協の常勤役員も務めてこられた。このため奥さんが家事は勿論、農業の大半を引き受けてきた。そしてY氏が農協の役員を退任する少し前、Y氏の母親が脳梗塞で倒れて、奥さんは7年にわたって介護に追われることになった。その母親を見送ると、奥さんはこれまでの緊張の糸が切れてか痴ほう症状を呈するようになり、昨年からは介護施設に通うとともに、骨折して入院を余儀なくされもした。

今度はY氏が奥さんの介護にあたることになったわけであるが、「苦労かけた妻への恩返しこそ人の道だと思い接している。介護を通して夫婦の残された人生で愛を見直す機会にもなった。妻は私を修行させる天使だと思う」としみじみ語っておられる。筆者には反省させられることばかりであるが、こうしたY氏のような思いと行動が今後多くの人に求められる状況になることは必至であろう。

危うい地方創生

第二次安倍内閣の発足と同時に「まち・ひと・しごと創生本部」を立ち上げ地方重視の姿勢が打ち出された。今年5月の増田レポート「消滅可能都市896のリスト」のショック故か、アベノミクスやTPPにより規制緩和・自由化・グローバル化を執拗に推進してきたこれまでからすればベクトルは反対方向にある。

それだけに地方重視の中身が懸念されることになるが、こうした流れに先行して総務省がリードしようとしているのが「地方中枢拠点都市制度」である。これは地方中枢拠点都市を圏域経済のけん引役と位置づけ、ここに地方交付税を集中させ都市機能の整備・拡充をはかり、地方にも「選択と集中」を徹底させるようとするもので、そのリアクションが怖い。

身近での助け合い

どのような地域・集落であろうと、そこには人々の暮らしがあり、そこで暮らす人々にとって、そこはかけがいのない地域であり集落である。都市機能の拡充・整備だけで地域や暮らしを守っていくことはできない。Y氏がケアメンに励むことに象徴されるように、あらためて家族・地域の力を発揮して助け合い、自立・自給を心がけていくことが大切になる。